

シンポジウム 12：看取りに必要な「言語」と「行動」

演題名	ハグとユーモアを添えた在宅緩和医療を実践して
-----	------------------------

概要

【ハグとユーモアの出会い】医師となり、二つの夢がありました。①医師としてがんの患者さんを手術で救いたい。②研究者として多くのがんの患者を救いたい。①14年間消化器・一般外科を勉強、②大学の免疫学教室でがんワクチンの研究をして、二つの夢を追いました。そんなある日、大学病院の人事的なトラブルで、大学病院から静岡の小さな病院に永遠に出向となりました。そこで②の夢は断たれました。静岡の田舎の病院で①の夢を追い求めました。そんなある日、田舎の病院で在宅の責任者を任されました。そこには①でも②でもないとても素敵な、三つめの夢・「在宅医療」に出会いました。今まで自分は「病気」ばかりを診て、病人を「人」として診ていなかったことに、初めて気づきました。その「人」たちはみんな素敵な人生の先輩たちでした。「そんな素敵な人たちに、自分はいったい何ができるのだろうか？」と自問自答していたそんなある日、「パッチアダムス」という映画に出会いました。そこには医療の中に沢山の「ユーモア」と「患者と友達」になるという、衝撃的なメッセージがありました。そして、「パッチアダムスと夢の病院」という本を読み、2004年にパッチアダムスに会いに行きました。そして、彼から直接頂いたメッセージは、「日本にハグを広めてみないか？」でした。これが、私の「ハグ」と「ユーモア」の出会いでした。

【方法】2004年より早速、日常の外来診療に、そして在宅緩和医療に「ハグ」と「ユーモア」を取り入れました。「ハグ」を①抱きしめる、②寄り添う、③話を聴く、④心の居場所をつくる、と考えました。そして、其々の患者や家族に合った「ハグ」と「ユーモア」を追求・実践しています。

【結果】最初は「ハグとユーモアを医療に取り入れるって、そんな無理でしょ！」という実感が正直ありました。しかし、「ハグ」と「ユーモア」を添え始めてめると、「医療ってこんなに素敵なんだ」と実感しました。そんな素敵なエピソードを短い時間ではございますが、皆さんに沢山ご紹介したいです。もちろん、失敗したことも沢山あります。「こんなやつもいるんだ」、「これも医療でいいんだ」と感じて頂ければ、そして皆様の今後の医療のお役に立てば、自分としてもしあわせます。